

『懷風藻』所載の「伝」とその虚構性

矢 作 武

小稿は懷風藻に記載された詩人の伝の特異性とその典拠を考
え、あわせて日本において個人の伝がいかにして可能になるかの
問題に言及したい。

一

懷風藻冒頭の大友皇子の伝は初めに次のように記す。

皇太子者淡海帝之長子也。魁岸奇偉、風範弘深、眼中精耀、
顧盼煒燁。唐使劉德高、見而異曰「此皇子、風骨不似世間
人。実非此国之分。」

日本書紀によれば、天智四年九月に唐使劉德高が来朝し、十二
月に帰国している。しからば、唐使の劉德高にたまたま識鑑の才
があったのであろうか。中国六朝の世説新語、容止篇第二十七話
の注に次の一条がある。

吳志曰「孫權字仲謀、策弟也。漢使者劉琬語人曰『吾觀孫
氏兄弟、雖並有秀明達、皆祿祚不終。唯中弟孝廉、形
貌魁偉、骨体不恆、有貴之表。』」

一方、吳志、吳主伝の孫權の条を見ると、注に、

江表伝曰「堅為下邳丞時、權生。方頤大口。目有精耀。
堅異之、以為有貴象。」

とある。一見して、大友皇子の伝は書紀記載の一条を種として、
中国史書によって創作したのではないかと疑われる。では三国志
によったと見てよいかというと、それほど単純ではない。大友の
伝に「この皇子、風骨、世間の人に似ず。」という。この意味が
普通の人と違うというのであるなら、漢文に熟さぬことに幼稚
な表現であるといわなければならない。むしろ「風骨奇特」ある
いは「非常」で済むところである。それをことさらに「世間の
人に似ず」と表現したのはなぜか。世説、容止篇第三十三話に次
の話がある。

王長史為中書郎、往敬和許。爾時積雪。長史從門外下
車、步入尚書省。敬和遙望、歎曰「此不復似世中人。」

この「此れまた世中の人に似ず」という表現に惹かれたのでは
ないか。ところが、この句の意味はその場面からも明らかでない
に、また、容上篇第二十六話の

王右軍見杜弘治、歎曰「面如凝脂、眼如点漆、此神仙中

人。」

の例に見る如く、「世中の人」とは一般の人の意味ではなく、「人間世界のもの」という意味である。そこで、伝の作者は誤解を恐れると同時に国の違いに重点を置いて「此の国の分にあらず」（中国ならいざ知らず、日本の国の分際の人ではない）とことわらざるを得なかったのではなからうか。また大友の伝は続けて次のように言う。

嘗夜夢、天中洞啓、朱衣老翁、捧日而至、擊授皇子。忽有_レ人、從_二腋底_一出来、便奪將去。覺而驚異、具語_二藤原内大臣_一。歎曰「恐聖朝万歳之後、有_二巨猾間黷_一。然臣平生曰、豈有_二如此事_一乎。臣聞、天道無親、惟善是輔。願大王、勤修_レ德。災異不_レ足_レ憂也。」

大友皇子が夢に見た内容は、天堂が開かれて朱色の衣を着た老翁が、天子の位を暗示する太陽を捧げて来たり、皇子に授けようとした時、忽ち人あつて腋の下から（あるいは掖底、すなわち宮門わきの小門のあたりから）奪ひ去つたというものである。皇子はこのような不吉な夢を実際に見たのであろうか。世説、識鑑篇第二十二話の晋の謝玄が苻堅を討つ話の注に次のように言う。

車頻秦書曰「苻堅字永固、武都氏人也。本姓蒲、祖父洪、詐_二称識文_一、改曰苻。言己当_レ王、应_レ苻命_一也。堅初生、有_二赤光流_一其室。及誕、背赤色、隱起若_二篆文_一。幼有_二美度_一。石虎司隸徐統名_二知_レ人_一。堅六歲時、嘗戲_二於路_一。統見而異焉。石問曰「苻郎、此官街、小兒行戲、不_レ畏_レ縛邪。」堅曰「吏縛_レ有_レ罪、不_レ縛_二小兒_一。」統謂_二左右_一曰「此兒有_二王霸相_一。」石

氏乱。伯父健、及父雄、西入_レ閩。健夢、天神使者、朱衣冠、拜_二肩頭_一為_二龍驤將軍_一。肩頭、堅小字也。健即拜為_二龍驤將軍_一、以_レ应_二神命_一。後健僭_二帝号_一。死、子生立。凶暴。群臣殺_レ之而立_二堅_一。云々。

車頻の記すところの苻健の見た夢は、天神の使者たる朱衣冠せし者が、甥の苻堅を拜して龍驤將軍となすというものであった。後に帝位を狙う苻健にとっては不吉な夢である。しかしともかく、甥を龍驤將軍となして神命に応じたのである。後に帝号を僭称したが、帝位を継いだわが子は群臣に殺され、結局は神託通り苻堅が帝となったのである。大友皇子の伝の作者は、皇子に苻健と同じ夢を見させたのである。

更に言えば、作者の胸中ひそかにいわんとするところは、「天中洞啓、朱衣老翁、捧日而至、擊授_二皇子_一」までではないのか。車頻の秦書に記すように、天神の使者たる朱衣冠の者が苻堅を拜して龍驤將軍となしたのは、堅が後に帝となる神命を受けていたのだ。それをわきからひつさらつた伯父は一旦は帝号を僭称し、わが子に帝位を継がせたが、全うさせることはできなかったのである。皇子の伝の作者はそう言いたかつたのだ。皇子の夢の中に「忽有_レ人、從_二腋底_一出来、便奪將去」の段まで入れなければならなかったのは痛恨の極みだったに違いない。叔父、天武に帝位を奪われ、その子孫に継がれていく皇統はいつわりなのだ。伝の最後にはこういう。

太子、天性明悟、雅愛_二博古_一。下筆成_レ章、出_レ言為_レ論。時議者歎_二其洪学_一。未_レ幾文藻日新。会_二任申之乱_一、天命不_レ遂。

時年二十五。

筆をとればすぐ文章ができ、一言しゃべると立派な議論になるという皇子の資質は、魏の悲運の王子、曹植を背景に想い描いたのではなからうか。世説の文学篇第六十六話、後に蒙求などにも採られて有名な七歩の詩の説話、

文帝嘗令東阿王七步作詩、不成者行大法。應聲便為詩曰「煮豆持作羹、漉菽以為汁。其在釜下燃、豆在釜中泣。本自同根生、相煮何太急。」帝深有慙色。の注に魏志を引いている。

陳思王植、字子建、文帝同母弟也。年十余歲、誦詩論及辭賦數萬言。善屬文、太祖嘗視其文曰「汝倩人耶。」植跪曰「出言為論、下筆成章。顧當面試。奈何倩人。」云々。

大友皇子の伝の作者は一体何を言いたいのか。周知の如く大友皇子の文才英華の面は日本書紀では一切記されていない。一方、大津皇子については書紀の持統紀に「容止端岸、音辞俊朗。」及「長弁有文才。尤愛文筆。詩賦之興、自大津始也。」と明記されている。後に述べる如く、懷風藻の伝の作者は大津皇子の悲運にも深い同情の念を寄せている。しかし、「詩賦の興り、大津より始まれり」とは一体何事か。詩賦製作の盛んになったのが大津皇子からであると解釈する説もあるが、そんなことではあるまい。どうみてもわが国の詩賦の最初は大津からだといっているのだ。懷風藻の伝の作者は勿論それをよく知っている。書紀の筆者の意図を知っているのだ。懷風藻の序文に、近江朝に既に「彫章

麗筆、非唯百篇。」と記している。伝の作者は単に大津皇子よりも前に大友皇子が詩賦を作っているのだというようなことを言っているのではあるまい。そんなことではない。大津などは大友に比べれば天地の差があるのだ。大友皇子伝は「皇子、博学多通、有文、武材幹。始親三万機、群下畏服、莫不肅然。年二十三、立為皇太子。広延、學士沙宅紹明・塔本春初・吉太尚・許率母・木素貴子等、以為賓客。」と記す。一方、大津皇子伝には「幼年好學、博覽而能屬文。及壯愛武、多力而能擊劍」という。差は明らかではないか。なるほど大津にも「好學」「博覽」「屬文」をいっているが、壮に及んでは武の方面に熱中しているともいう。大友の方は全てを網羅して、多くの學士を賓客として羽翼とし、筆をとれば立どころに成る文才を持っているのである。かの魏の曹植が、父曹操のもとに集まった建安の七子に多く學び、丁儀・丁廙兄弟や楊修を羽翼とし、六朝人から詩賦作家として最高の稱賛を受ける詩人である如く、大友皇子を稱賛しているのではなからうか。正史、書紀の記述を徹底的に否定しているのではない。

皇子の伝の最後に「壬申の乱に會ひて、天命遂げず。年二十五。」と記す。「天命不遂」は伝の作者の心情をうかがう最も微妙な一句と考えられている。皇子の立場、あるいは運命に深い同情が寄せられているといわれる。それはその通りに違いない。曹植が夭折した弟のために作った「蒼叙誄」の最後で「矧爾既夭、十三而卒。何辜於天、景命不遂。」と嘆いている。景命も天命も同じだ。しかし、皇子の伝の作者は、単に皇子が夭折したこと

を嘆いているのであろうか。世説 豪爽篇の第十一話に次の如く記す。

陳林道在西岸。都下諸人共要至牛渚會。陳理既佳。人欲共言折。陳以如意挂煩。望雞籠山。嘆曰「孫伯符志業不遂。」於是竟座不得談。

一座の清談を沈黙せしめた「孫伯符（策）、志業遂げず」の一、言は何を意味しているのであろうか。注に呉録を引いて言う。

長沙桓王、譚策、字伯符、吳郡富春人。少有雄姿風。年十九而襲業。衆号孫郎。平定江東、為許貢客射破其面、引鏡自照、謂左右曰「面如此。豈可復立功業乎。」乃謂張昭曰「中國方乱、夫以吳越之衆、三江之固、足以觀成敗。」呼大皇帝、授以印綬曰「平江東之衆、決機於兩陳之間、卿不如我。任賢使能、各尽其心、以保江東、我不如卿。慎勿北渡。」語畢而薨。時年二十六。

かの呉の孫権の兄、孫策、「わかくして雄姿風あり。年十九にして業をつ」いだ彼は、江東を平定し、戦いに顔面を射られ、鏡に照して群臣に言う。「面かくのごとし。あにまた功業を立つべけんや」云々と。薨ぜし時、年わずかに二十六。この痛恨と「志業遂げず」の一句は、大友伝の作者の胸を衝かなかったのであろうか。大友の即位について記さぬ日本書紀に対して、皇子に極めて同情的な伝であった。「天命不遂」の意味を單純に、寿命を完うしなかつたと取つてはなるまい。「天命」はカモフラージュなのだ。「志業遂げず」と言いたかつたのではなかつたか。勿論、天命に天から授かる使命の意味はあるし、皇子に帝たるべき命が存

したと直接的に意味を取ることも可能かもしれぬ。しかしそれでもなお、「志業遂げ」ざりし孫策の説話を通して、より深く伝の作者の心情を窺い得るのではなからうか。

二

さきに一部分触れた大津皇子の伝は如何であらうか。伝の作者にとつての、大友と大津の詩賦における称揚の差の懸隔は上に説いた如くであるが、その悲劇の運命には径庭はない。今、ことさらに懷風藻の撰者の素姓には触れない。しかし、書紀の大友皇子関係の記述に抗して皇子を描き、危険な伝を記した作者が、書紀を記した側の同じ権力に倒され、謀反の罪名で死んだ大津皇子の悲劇に痛憤を感じないはずがない。

皇子者、淨御原帝之長子也。狀貌魁梧。器宇峻遠。幼年好學、博覽而能屬文。及壯愛武、多力而能擊劍。性頗放蕩、不拘法度。降節礼士。由是人多附託。時有新羅僧行心、解天文卜筮。詔皇子曰「太子骨法、不是人臣之相。以此久在下位、恐不全身。」因進逆謀。迷此詿誤、遂圖不軌。嗚呼惜哉。蘊彼良才、不以其忠孝保身、近此紆豎、卒以戮辱自終。古人慎交遊之意、因以深哉。時年二十四。

この懷風藻の伝を、書紀の文「皇子大津、（中略）容止端岸、音辞俊朗。為天命開別天皇所愛。及長弁有才學、尤愛文筆。詩賦之興、自大津始也。」と較べれば明らかである。懷風藻の「狀貌魁梧、器宇峻遠、幼年にして學を好み、博覽にしてよ

く文を属す。壮なるに及んで武を愛し、多力にしてよく剣を撃つ。性頗る放蕩にして、法度に拘はらず。節を降して士を礼す。是に由つて人多く附託す。」という描写は仲々鋭い。書紀の「容止」などと異り、「状貌」という極めて直接的な、生々しい語は世説に「状貌非常」（賈媛篇第十八話）「衣冠状貌如平生」（巧芸篇第四話）等多く使われる語であり、「魁梧」も多く見られる。皇子の伝に「節を降して士を礼す」というが、世説、品藻篇第六話「正始中、人士比論」の注に引く典略に「（荀）彧、為人英俊、折節待士、坐不累席」とある。文字を一部変えて同じことを言っているのだ。杉本行雄氏は『懷風藻』の中で、「性頗る放蕩、法度に拘はらず」は「器宇峻遠」と調和せず、書紀の「容止端岸、音辞俊朗」の評語の方が妥当ではないかと評している。私は大津の伝の作者は書紀の記載を基にして、遺された詩篇とあとは中国史伝類ごとに世説の諸説話によつて全く新しい大津像とその悲劇を創りだしたのではないかと思う。武を好んで士を召しかかえたという部分は、東晋の明帝が太子であった時の逸話を思い浮べていたのではないだろうか。世説、豪爽篇第五話にこうある。

晋明帝欲起池台、元帝不_レ許。帝時為太子。好武養士。

一夕中作池、比曉便成。今太子西池是也。

明帝は池をめぐらした楼台を作ろうと思ったが、元帝は許さなかった。その頃明帝は太子であったが、日頃武勇を好んで壮士を召しかかえていたので、一晚のうちに池を作り、明け方にはもうできあがっていた。今の太子西池がそれであるという。一方、大

津皇子の今にのこる数少ない詩は何を詠じているであらうか。「五言。春苑言宴」には「開_レ衿臨_二靈沼_一、遊_二目步_二金苑_一。」といひ、「五言。遊獵」には「朝撰_二三能士_一、暮開_二万騎筵_一。吃_二鸞俱齡_一矣、傾_二義共陶然_一。月弓輝_二谷裏_一、雲旌張_二嶺前_一。曦光已隱_二山_一、壮士且留連。」と詠んでいる。前者には「靈沼（御苑の池）に臨み」といひ、後者には「朝に撰ぶ三能の士、暮に開く万騎の筵、……壮士且く留連す」という。これらの詩句と「ももづたふ磐余の池に」（四一六）の歌を読んで、どうして世説、豪爽篇の太子の説話を思い浮べないことがあろうか。伝の「性頗る放蕩、不拘_二法度_一」は「器宇峻遠」と調和しないと杉本氏はいうが、そうであらうか。世説、文学篇六十九話の注、名士伝曰（劉）伶字伯倫、沛郡人。肆意放蕩、以_二三宇宙_一為_二狹_一。」とか、德行篇第十五話の注、魏氏春秋曰「阮籍字嗣宗、……宏達不羈、不拘_二礼俗_一」、あるいは簡傲篇第六話の注、鄧粲晋紀曰（王）澄、放蕩不拘、時謂_二之達_一。」などの例があり、「放蕩不拘」は「達」すなわち「達する。至る。通る」というような、六朝特有の価値観を特った評語で、伝の「降_二節礼士_一」への文章の続き具合から考えても讃辞であるようだ。

一体、書紀は大津謀反の事件の原因を皇子個人に帰そうとして、「詔曰、皇太子大津謀反。詿誤吏民帳内不得_レ已、云々」と記し、「又詔曰、新羅沙門行心、与_二皇太子大津謀反_一、朕不忍_二加法_一。」と言う。それに対して懷風藻の伝の作者は行心が「逆謀を進む」と記し、皇子は「此の詿誤に迷ひ、遂に不軌を図」ったのだという。書紀の記述を見て、立場を逆にして悲劇を描いたのだ。行心

のことは「太子の骨法、是れ人臣の相にあらず、此れを以ちて久しく下位に在らば、恐るらくは身を全くせざらむ」は、伝の作者が記録を見たり、伝承を聞いたりして書いたわけではあるまい。

皇子の「七言。述志」の「後人聯句」「赤雀含書時不至、潜竜勿用未安寝」(作者不明)の句から、周易、乾の卦、九二の象伝「潜竜勿用、陽在下也」を当然思うであらう。論衡の骨相篇には「骨法形体、在不応者、則必別離死亡、不得久享介福。」と言っている。伝の作者は行心を天文卜筮を解する者として設定したのである。先に記した大友皇子の伝の劉徳高の話と同じく創作したのである。^(まじ)虚構によって「虚構」の正史を否定しているのである。

三

しかし結論は急ぐまい。懷風藻の王子の伝の最後、葛野王の伝を見なければならぬ。王は淡海帝の孫、大友太子の長子で、母は淨御原帝の長女、十市内親王である。

器範宏逸、風鑑秀遠。材稱棟幹、地兼帝戚。少好學、博涉經史。頗愛屬文、兼能書画。

右の評は仲々の讃辞である。官位の割には。しかし重要なのは、次の文である。

高市皇子薨後、皇太后引王公卿士於禁中、謀立日嗣。時群臣各挾私好、衆議紛紜。王子進奏曰「我國家為法也、神代以來、子孫相承、以襲天位。若兄弟相及、則亂從此興。仰論天心、誰能敢測。然以人事推之、聖嗣自然定矣。此

外誰敢問然乎。」弓削皇子在座、欲有言。王子叱之、乃止。皇太后嘉其一言定國。特閤授正四位、拜式部卿。

書紀には持統紀十年七月の条に「庚戌(十日)、後皇子尊薨。」とあるだけである。高市皇子が死んで、持統帝は若く死んだわが子草壁皇子の遺子、輕皇子を皇太子にしたかった。衆議は紛糾した。その時葛野王は「我が國家の法たるや、神代以來、子孫相承し、以て天位を襲げり。若し兄弟相及ばざれば、則ち乱これより興る」と言ったという。いうまでもなく、まず「神代以來、子孫相承」が事実ではない。大友皇子の長男である葛野王が、大友を倒した天武帝の後であつた持統帝の目の前で、「若し兄弟相及ばざれば、則ち乱これより興る」などと言えるであらうか。この語は古代史上最大の乱、壬申の乱の原因を衝き、天武帝を鋭く非難しているのだ。時移り世変わり、持統帝はそんな昔のことは忘れたとでもいうのであろうか。そんなことはあるまい。それは忘れようとしても忘れられないはずだ。今その発言が持統に有利なものであつたとしても、許される筈がない。伝の作者が葛野王に言わせているのではないか。伝の作者が最も言いたかつたのはこの一句かも知れない。天智帝がすでに定めていた「不改常典」については種々の説があるが、ほぼ通説になっているのが、帝が中國風の長子相統制をうけ入れ、皇位繼承法に盛り込んだものという考えだ。それを破つた天武帝から持統帝にかけて、さらに嫡子相統制が当然意圖されていたであらう。持統がすでに全て手を打っていないはずがない。「其一言、定國」と記すが、そんな芝居がかつたいきさつは信じられない。次の世説の方正篇第二十三話は東普

の元帝が皇太子を決定する時の話である。

元皇帝既登^レ祚、以^レ鄧后之寵、欲^レ舍^レ明帝而立^レ簡文。時議者咸謂「舍^レ長立^レ少、既於^レ理非^レ倫、且明帝以^レ聰亮英斷、益宜^レ為^レ儲副。」周・王諸公並苦^レ懇切。唯^レ刁玄亮独欲^レ奉^レ少主、以^レ阿^レ帝旨。元帝便欲^レ施行、慮^レ諸公不^レ奉^レ詔。於是先喚^レ周侯・丞相入、然後欲^レ出^レ詔付^レ刁。周・王既入、始至^レ階頭。帝逆遣^レ伝詔、退使^レ就^レ東廂。周侯未^レ悟、即卻略、下^レ階。丞相披^レ撥伝詔、徑至^レ御牀前曰「不審、陛下何以見^レ臣。」帝默無^レ言。乃探^レ懷中黃紙詔^レ裂擲^レ之。由^レ此皇儲始定。云々

世説の説話は正史の記録にくらべて瑣細な断片にすぎない。しかしそれ故にまた、正史に描かれることのない人生の、歴史的事件の断面を描き、屢々鋭く人間と歴史の真実にせまる如くである。しかしそれが事実であるかどうかは別問題である。注者劉孝標もまた疑う。中興書の記述を引いて「而此^レ世説^レ互異。然法盛採^レ撫典故、以^レ何^レ為^レ實。且從容諷諫、理或可^レ安。豈有^レ登階一言、曾無^レ奇説、便為^レ之改^レ計乎。」というが、結局史料をあれこれ探り出し、理屈つけても真実は判らない。後の晋書の王導伝には「初、帝愛^レ瑯邪王^レ、將^レ有^レ奪^レ嫡之議、以^レ問^レ導。導曰「夫立^レ子以^レ長。且紹又賢。不^レ宜^レ改革。」帝猶疑之。導日夕陳諫。故太子卒定。」とある。最大公約数的に言えば、晋書の記述が事実に近いと言えるかも知れない。しかしそれでは皇太子決定という歴史の緊迫した場面が目に見えてこないのだ。王導の登階の一言あつて国を定むるドラマチックな場面が必要なのである。

懷風藻の伝の作者が伝を仮りて何を言わんとしているのか、明らかだと思ふ。序に「余以^レ薄官余閑、遊^レ心文囿、閱^レ古人之遺跡、想^レ風月之旧遊。雖^レ音塵渺焉、而余翰斯在、撫^レ芳題而遙憶、不^レ覺^レ淚之泫然。云々」と言うが、作者は薄官のひまつぶしや文人の筆のすさびにこれらの皇族の伝を書いたのではあるまい。正史、日本書紀が既に三十年前に完成し、唯一正統の歴史として權威を持っていた。国家の威信にかけて異伝は許されなかったであらう。中国の魏晋期の如くには史官以外の人々による個人の伝（世外の人たる僧侶の伝は除く）や家伝の製作の習わしもなかったわが国で、天平勝宝三年の時点で皇族四人を含む九人の伝が書かれたのは異様に思われる。続日本紀に載せられた個人の伝は、文武天皇四年（七〇〇）の道照和尚の伝を始めとして懷風藻（七五一年）までの約五十年の間に道慈・玄昉・行基の三人の僧侶と、良吏として死後神に祠られた道君首名だけである。伝が急に多くなるのは天平宝字期に入ってからで、四年（七六〇）の多治比広足、同じく光明皇后、六年（七六二）の石川年足、七年（七六三）の鑑真大和上、同じく藤原弟貞、八年（七六四）の惠美押勝等の伝が見られる。田中日佐夫氏は七〇〇年から約半世紀の間に伝を記載された者が僧侶と、死後ただちに祠られて神の列に加えられたものであることに注目して、これらの人たちが死に際しておそろしい危険な死霊に変化する可能性の少ない人たちであると当時の人々からみられていたと考えられるといわれ、道照和尚が本邦火葬の始めであることから、この間に葬送儀礼と死霊觀念の変化があつたのではないかと述べておられる。押勝や延

慶による藤氏家伝が記されたのも、伝が多く記載されるようになる天平宝字四年である。こう見てくると、懷風藻の伝はその転換期の最後の時期に位置し、四人の僧侶の他に五人の俗人の伝を記していることは最も注目しなければならない。

この伝の書かれた時代の政治状況はどうかというと、藤原仲麻呂が次第に権力を独占し始める時期に当る。天平二十一年（天平感宝元年、天平勝宝元年、七四九年）、病弱の聖武天皇が阿倍内親王に譲位した後、光明皇后は大権を行使すべく皇后宮職を拡大強化して紫微中台を設け、その長官は大納言の仲麻呂が兼務している。統紀の伝によれば、「枢機の政、ひとり掌握より出づ。是に由りて蒙宗右族その勢を妬む。」というありさまであった。また宝龜十一年の前大納言文室邑珍（大市）の薨伝には「勝宝以后、宗室枝族、幸に陥るもの衆し。邑珍、髪を削りて沙門となり、以て自全を図る。」とある。天武の孫、長親王の子である大市は僧形に身を変えて安全を図り、天智の孫、志貴皇子の子である白壁王は酒に頼みしている。橘諸兄の子、奈良麻呂はすでに天平十七年以來暗躍し、勝宝元年にも反仲麻呂を佐伯全成に働きかけているし、天平十九年、春宮大夫、皇太子学士から右京大夫にかわった従四位上吉備真備も勝宝二年正月、筑前守に左遷されている。仲麻呂は正史を作る側である。いや正史を作るものである。岸俊男氏は、藤氏家伝の編集と前後して続日本紀の原型、つまり日本書紀につづく正史の編修が行なわれていた可能性が多い、しかもその時期から推してやはり仲麻呂の発議によると思われるといわれる。^(注4) 懷風藻の伝の作者はこういう政治状況の中に身を置いて

ているのだ。作者は正史の権威と対置すべき詩文の世界を構築しようとしたのではないか、いや詩文の世界に生きざるを得ない衝動があったのではないか。文人として生き、詩文に身を沈めて志を述べる。もはや死霊を恐れる必要はないのだ。文人の伝統が生まれようとしているのだ。小島憲之氏は撰者について、政治的立場を考える説に対して、文学の表現と政治的立場とは必ずしも一致しないといわれる。文学とはそういうものだろうか。世捨て人たる僧侶はともかくとして、古代において詩文を用いる士大夫階級に政治的ならざる人間が存在し得るであろうか。伝の作者あるいは懷風藻の撰者に言及する前に、もう少し古代の伝とその周辺の世界にさまよってみたい。

注1 日本の漢文伝と世説との関わりについては拙稿「三善清行の方法―藤原保則伝考―」（国文学研究・五十集）等ですべたことがある。

2 小島憲之氏は『上代日本文学と中国文学』（下）の中で、この条が文選序等を参考にしたものであって文字通りに解すべきではないといわれる。

3 『二上山』学生社。

4 『藤原仲麻呂』吉川弘文館。

追記 小稿校正の段階で横田健一氏の『白鳳天平の世界』（創元学術双書）所収『懷風藻』所載大友皇子伝考』『懷風藻』所載僧伝考の二先行論文を読んだ。伝の記事の当否・作者の政治的立場等、教えられる所が多く、小稿の虚構・創作の面からの見方とはおのずから異った趣きがあり、今後の論考の重要な参考にさせていたきたい。